



開催セミナー	ワークショップ
日時	平成30年12月14日(金) 13:00 ~ 14:00
場所	5322 演習室
参加者	教職員8名
テーマ	moodleの活用事例～授業運営のためのmoodleの基本的な使い方と工夫～
内容	<p>本ワークショップは、平成30年10月31日(水)に開催された第1回全学FD/SD研修会のアンケート結果を踏まえ、「moodleの実践的な使い方が知りたい」という参加者の要望を受けて実現したものです。</p> <p>講師 在間 敬子(経営学部教授/教育支援研究開発センター長)</p> <p>moodleの機能や設定についての説明から始まり、自身の授業では学生への連絡ツールとしても使用されています。授業で配布した資料をmoodleに公開する際は期限付きにしたり、敢えて授業でしか配布しないといった、学生に継続的な学習を促す工夫をされています。</p> <p>課題提出の使用方法の紹介では、ゼミのグループワークの内容を途中で提出させることにより、課題の持参忘れや学生が欠席した時の対応に役立つと述べられ、小テストの機能では、他の履修者と問題が全く同じにならないように設定するといった工夫をされています。小テストの結果は保存し、学生から成績に関する問い合わせがあった場合に活用することができます。また、対話シートもmoodleで実施や回答データのダウンロードも可能なため、結果を学生にフィードバックすることもできると紹介されました。学生のご家族の方からの授業出席に関する問い合わせに対しては、moodleの課題提出状況やmoodleのアクセス時間数から出席状況が確認できるため、役立っています。</p> <p>moodleの実践事例だけでなく、その設定や使用方法についても詳しく紹介いただいたことで、moodleをより活用したい教職員にとって有意義な機会となりました。</p>

開催セミナー	英語講義FDワークショップ
日時	平成31年2月15日(金) 10:00 ~ 11:30
場所	12401 教室
参加者	教職員12名
テーマ	英語講義の課題解決に向けて
内容	<p>既存科目の充実に役立てることを目的に、英語講義FDワークショップを実施しています。今年度は、2つの科目「英語講義の教授法」と「抱えている課題や課題に対する対応策」の共有を通じて、情報交換を行いました。</p> <p>講師 齊藤 健太郎(経済学部教授/「経済学英語講義B」科目担当) キリス カルマツダ ジョアン(外国語学部教授/「英語圏文化論I」科目担当)</p> <p>「経済学英語講義B」では、毎年3割程度の留学生が履修しているのが特徴で、実施するうえでの課題としては、対応している英語教材が少ないこと、日本人学生が英語でノートをとる難しさ、留学生と日本人学生の専門の違いによる学習の目的の違いなどがあげられました。また、それらの課題に対する対応策として、BBCニュースなどをとりあげ身近な話題に近づける学生の興味を引き付けていること、パワーポイントのスライドを全回分準備し事前にmoodleにアップしていること、ディスカッションを取り入れることなど、項目ごとに工夫されている点が紹介されました。</p> <p>「英語圏文化論I」では、学生の積極的な授業参加を促すために、「Flipped Classroom(反転授業)」という教授法を取り入れることが紹介されました。教室で説明を聞き、家で課題に取り組む従来の方法を「反転」させ、自宅ではオンラインなどを利用し、moodleにアップされている動画を視聴、教室ではそれらの内容を反映した応用問題やグループワークを取り入れていることが共有されました。</p> <p>本ワークショップでは、具体的な事例紹介に基づき参加者間の意見交換が行われ、各自が抱える悩みについて話し合う良い機会となりました。</p>

参加された教職員の声

- ・スマートフォンとの連動で、その場でアンケートなどを取ることを取り入れていきたい。
- ・ICTとアナログ(紙媒体)を上手に使い分けることで、より効果が上がるのかなと感じました。

参加された教職員の声

- ・とても具体的で自分の講義に役に立つ内容でした。
- ・他の先生方が講義をどのように進めているのか知る機会がなかなかないので良い機会でした。

高等教育フォーラム第9号発行

本学は、毎年、「高等教育フォーラム」を発行しています。その目的は、次のとおりです。

- ・大学教育に関する学術的研究の成果発表と実践的報告
- ・本学の学部及び大学院の教育に関する論文等の収集・蓄積・発信
- ・本学の組織的なFD/SD活動の推進

これまで、第8号まで発行しており、アクティブラーニングやキャリア教育、グローバルサイエンスコース、ラーニングcommons、グローバルcommons、ルーブリックと、多岐に渡るテーマの論文やレポートが投稿されています。投稿者は本学教員のみならず、本学職員による実践報告やレポートもこれまで多く投稿されています。

第9号は、研究論文2本、実践報告・調査報告6本、レポート5本の合計13本が掲載されます。京都産業大学の高等教育フォーラムは、「京都産業大学学術リポジトリ」(<https://ksu.repo.nii.ac.jp/>)より閲覧できますので、興味のある方は是非、ご覧ください。



CERADES News Vol.14 2019年3月発行

編集/発行 京都産業大学教育支援研究開発センター

〒603-8555 京都市北区上賀茂本山 Tel:(075)705-1729

e-mail: kyoiku-shien-center@star.kyoto-su.ac.jp URL: <http://www.kyoto-su.ac.jp/about/cerades/index.html>



スチューデントcommons誕生



スチューデントcommons(イメージ図)

真理館新設に伴い、京都産業大学に4つめのcommons「スチューデントcommons」が誕生します。スチューデントcommonsは、主体的な学びの空間で、プレゼンテーションやグループでのディスカッション、授業の事前事後学習、発表資料の作成など、学習の準備作業ができる環境を整えています。また、備付のPC、ホワイトボード、モニタも使用できます。

スチューデントcommonsの詳細は、今後発行するCERADES Newsにてお伝えする予定です。

Contents

p2 <F工場の授業外支援>
 オープンキャンパスイベント「学部ディスカバリー」
 ピア・サポーター能力向上のための研修

p3 <FD/SD活動の推進>
 第2回 全学FD/SD研修会の開催

p4 <FD/SD活動の推進>
 平成30年度ワークショップの開催
 英語講義FDワークショップの開催
 高等教育フォーラム第9号発行

CERADES Newsは、京都産業大学の特色ある教育・学習の実践事例を紹介することを目的とし、セラデススタッフが企画・取材・デザイン制作している刊行物です。

CERADES(セラデス)は、教育支援研究開発センターの英語名称 Center for Research and Development for Educational Support の略称です。

F工房では、授業外におけるワークショップなどのプログラム設計や運営支援を行っています。今回は、平成30年度に実施した授業外支援をご紹介します。

オープンキャンパスイベント「学部ディスカバリー」

オープンキャンパスでは、進みたい学部が明確でない高校生を対象に、学部選びの一助となるイベント「学部ディスカバリー」を開催しています。このイベントは講義形式で実施していましたが、ワーク形式へ変更したいと入学センターから相談を受けました。高校生が「学部ディスカバリー」参加後、各学部イベントの中から自身が参加したいイベントを選べる状態になってもらうためには、どのようなワークにすれば良いかについて議論を重ね、ワークの方法を提案しました。高校生はイベント参加に対して受け身状態の人が多くという予想から、「高校生が聞いているだけの時間ができるだけ発生しないこと」「高校生の主体性を引き出す」ことを心がけ、講義形式による一方通行から双方向となるように、キャンパスツアースタッフ（以下、キャンスタ）が積極的に関わられる内容としました。当日の運営は、入学センター職員やキャンスタと協働で進行し、アイスブレイクでは、緊張を解きほぐすために、運営スタッフからテンポよく投げかけられる質問に対して参加者は当てはまるものに手を挙げていくという、会場一体型のアイスブレイクを行いました。その後のグループワークでは、高校生に「具体化した関心対象に関連のある学部のイベントに参加してもらうこと」を目標に、「興味・関心ワークシート」を用いた自己分析を行い、分析内容を基に高校生同士でペアワークを実施し、他者との比較や共通部分を探ることで自己理解を進めました。キャンスタが高校生と積極的に関わったこともあり、高校生の自己理解が進み、興味の持てる学部が出てきた高校生もいました。



入学センター担当者の感想

個人ワークとペアワークを入れ、さらにキャンスタを動員したことにより、講義形式で職員が説明するだけの時に比べて有意義な時間になったと思う。特に、高校生の身近な先輩である、キャンスタが生声を届けたことで、学部選びのイメージをより膨らませやすくなり、より主体的に考えてもらえたように感じた。

F工房担当者の感想

ペアワーク時、高校生同士のコミュニケーションがあまり進んでいなかった様子を見て、受け身状態から主体的に動く状態をつくることに改めて難しさを感じた。また、高校生にとってキャンスタがそうだったように、初対面でも立場の近い人はその場に居るだけで人の心を開くことができる可能性が高いのだと肌で感じた。

ピア・サポーター能力向上のための研修

学生を対象に修学サポートや履修相談等に取り組んでいるピア・サポーターは、サポーター自身の能力向上を目的に研修を実施しています。ピア・サポーター研修について教学センターより相談を受け、F工房が研修を設計・運営しました。

ピア・サポーターが希望する研修は、「リーダーシップをとる力」「イベントで新入生を取りまとめる力」「日常のミーティングでメンバーを取りまとめる力」を身につけることでした。リーダーシップには様々な種類がありますが、メンバーを引っ張る「指導型リーダーシップ」ではなく、メンバーを支える「支援型リーダーシップ」に焦点を当てました。特に「話し合いの場面で一人ひとりの力を引き出す力」を身につけることを目指し、小グループに分かれて「ピアサポって何のためにいるの?」について話し合い、その過程をふりかえる研修内容としました。ふりかえりでは、「一人ひとりが参加できていたか」「一人ひとりの力を引き出す話し合いには何が必要か」について話し合うことで、自分たちの経験に基づいて考えを深められるよう工夫しました。



学生の感想

これまで、自分が率先して仕切ったことで班員が何もしなくなってしまった経験が何度もあった。今回の研修で、その方法だけではうまくいかない理由を学べた。
メンバーの学年や経験の違いによって参加度に偏りが発生した。参加度が均等になるよう配慮する必要があると気づいた。
修学支援の場面においては、自分の意見を言うだけでなく、相手が話しやすい環境を作ることができるように感じたいと感じた。

F工房担当者の感想

グループの構成員の間には力関係の偏りが発生することや、その偏りを調整することの必要性に気づく機会を提供できた。
教学センター職員だけでなく、研修担当のピア・サポーターと打ち合わせを重ねることで、研修内容に学生の声を反映できた。

AI時代の科学教育～経験学習はICTでどこまで支援が可能か～

講師 寺野 隆雄 氏（東京工業大学名誉教授 / 筑波大学名誉教授）

1月10日（木）、教育支援研究開発センター主催「AI時代の科学教育～経験学習はICTでどこまで支援が可能か～」を開催しました。中長期的な視点から本学での教育や教育支援について今後考えるため、また中長期的な展望を踏まえつつ、現在の教育手法の最新事例を学ぶため、講師の実践に基づく情報技術に関連する教育方法をお話いただきました。特に経験学習について、ゲーミングシミュレーションやケースメソッドに関する事例が紹介されました。当日は、学長や理事長をはじめとした本学教職員、学生、大学院生46名が参加しました。



講演要旨

AIの研究開発は現在、第3次ブームとなっており、その背景には、ディープラーニングの登場とコンピュータの能力向上があります。AIの技術進歩は非常に早く、大学では学生たちに最先端のことを学ばせる必要が出ていますが、その一方で、高校までで学ぶ内容は大きく変化していません。教育予算が削減されている現状、そのギャップをいかに埋め、「品質」を保証された学生を社会に送り出すかが、大学教育の課題です。

大学の基礎教育として必要なことは、必ずしも、進歩する技術を教えることではなく、新しいものが出てきたときに自ら学べる力を育てることです。その意味で、「正解のない課題に対する経験学習」は重要であり、その手法として、寺野先生ご自身の教育事例として、マンガを使ったケースメソッドや、ビジネスゲームのシミュレーションがあり、課題発見や問題解決といった教育の重要度が高まります。

高等教育の長い歴史において、教師が知識等を生徒に教えるという教育スタイルになったのは、比較的新しいことです。AI時代の教育では、「教えるから教わる」「自ら学習する」という場の提供や仕組みを作ることが必要になっています。その点では、グループ学習がカギとなり、情報技術の活用において、教員よりも学生の方が使いこなしている場合があるため、教員は「できる人」を見つけ、「できない人に教える場を作る」「教え方をサポートする」ということをしていくこととなります。今後の教育現場では、学生同士が互いに学び合う「グループ学習」と、それを実現する「コーチング」が一層重要になります。

参加者の声より

- ・興味深い内容だった。学生同士が教え合う経験が重要という話に同感である。
- ・技術的な話をされても分からないかなと思っていたが、AI時代における教育の在り方について考える機会になってよかった。
- ・色々と考えるヒントを頂戴できた。ゲームの環境を利用した経営戦略のシミュレーションの話や、実際の画像（カメラなどで撮影したもの）の特徴だけをうまく抽出して「線画」などのイラストにするといった話は面白かった。
- ・専門的にAIを研究されていた先生のお話しなので、歴史だったり、見解だったり、多くの示唆をいただいた。
- ・興味深く拝聴した。プログラミングの教育とビジネスゲームについて関心があり、もう少し詳しくお聞きしたかった。